

柏会場

平成31年1月26日(土)・27日(日)

廣池千九郎記念講堂

参加費 3,000円(食事・宿泊・懇親会代別)

大阪会場

平成31年2月17日(日)

シティプラザ大阪

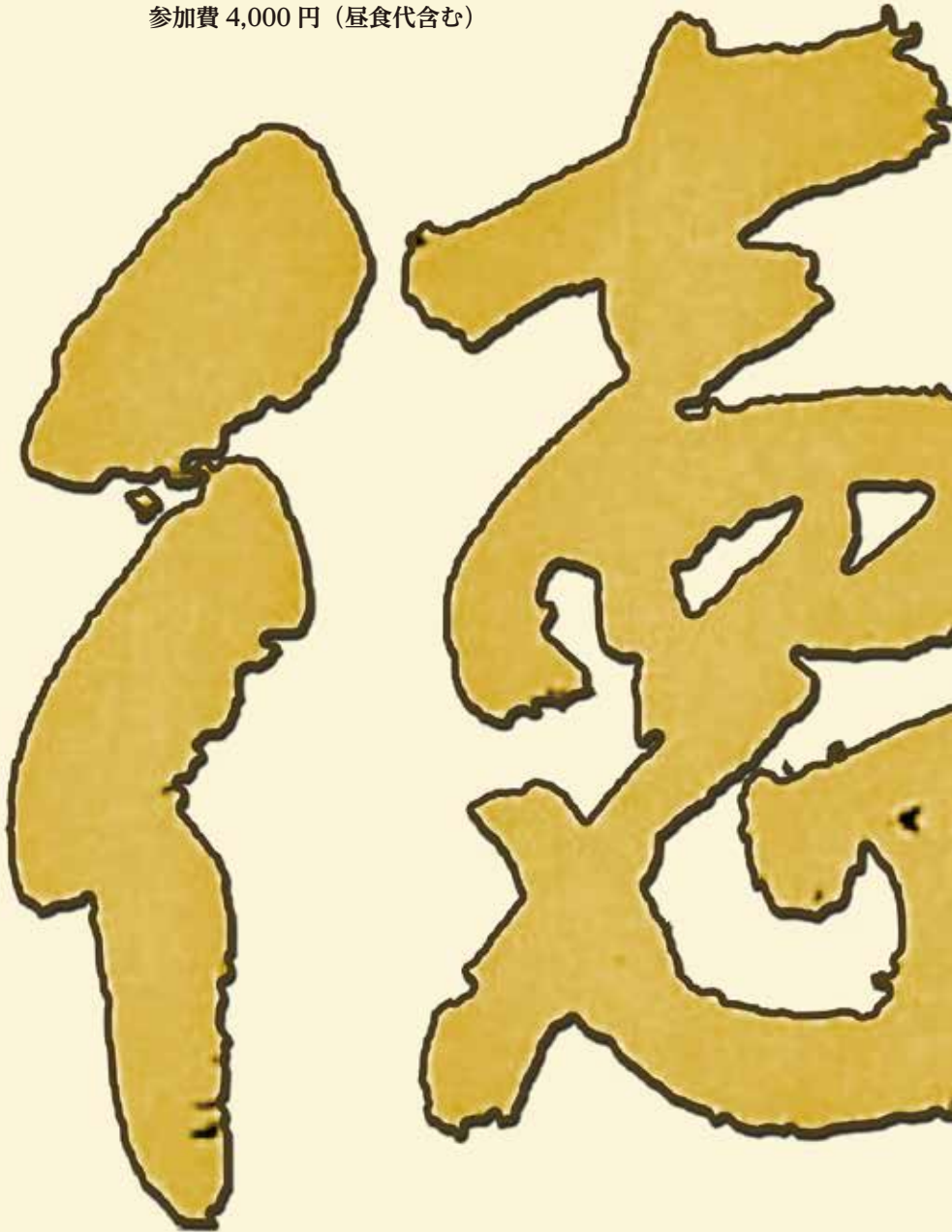
(大阪市中央区本町橋2-31、地下鉄「堺筋本町駅」徒歩6分)

参加費 4,000円(昼食代含む)

第46回 モラロジー 研究発表会

共通テーマ

徳について考える



主催：公益財団法人モラロジー研究所

お問い合わせ・申込先



公益財団法人 **モラロジー研究所**

THE INSTITUTE OF MORALOGY

道德科学研究センター事務室

〒277-8654 千葉県柏市光ヶ丘2-1-1

TEL : 04-7173-3252

FAX : 04-7173-3263

Email : rc@moralogy.jp

<テーマ> 徳について考える

私たちは徳という言葉在日常、何気なく使いますが、徳にはどのような意味があるのでしょうか。また、目に見えない徳というものは私たちの生活の中でどのように働いているのでしょうか。今回はこのような問題意識を出発点に、多角的な視点から徳について考えます。

柏会場 発表者と発表要旨（平成31年1月26日～27日） ※青字は各発表者のテーマです。

◆個人研究発表

宮下 和夫（副センター長・主任研究員、麗澤大学准教授） **「徳」字について**

「徳」という言葉と「道徳」という言葉とは相重なる部分を共有しているものの、それらの言葉から受ける印象はかなり異なったものではないだろうか。本発表では「徳」という漢字に焦点を当て、「徳」字が様々な意味で用いられてきた経緯を踏まえながら、「徳」とは何かに迫りたい。

犬飼 孝夫（センター長・教授、麗澤大学教授） **徳をどう説くか——陰徳と積徳をめぐって**

日本人は徳を積むこと（積徳）や、それを人目につかないところで行うこと（陰徳）を重視してきたように思われる。廣池千九郎は、徳について権利と義務という観点から論じ、徳を数量化された分かりやすいイメージで提示している。廣池はまた積徳の動機と目的、および、苦難の受容と徳の関係について重要な教を残している。

梅田 徹（教授、麗澤大学教授） **廣池千九郎が提起した「最高道徳」の内容と構造について**

廣池千九郎が提示した「最高道徳」は「広汎な」概念であり、その中には、たとえば、「神」「徳」「品性」といったいくつかの重要な概念が盛り込まれ、あるいは関係づけられている。本発表は、それらの要素の関係性に注目しながら、「最高道徳」の内容および構造に光を当てようとする一つの試みである。

◆講演 **立木 教夫**（客員教授、麗澤大学名誉教授）



演題 「道徳はいつ始まり、どのように進化したのか—自然史の観点から—」

道徳とは何だろうか？ この問いを、人類進化の中に位置づけ、道徳と呼ばれることになった精神作用と行為が創発したときの原初形態について、また、その後の進化形態について、現代科学の成果を踏まえて考察する。そして、その道徳の起源と進化の知見から、徳、そして、最高道徳に関する解釈を、いくつか述べてみたい。

◆個人研究発表

宗像 俊輔（研究助手、一橋大学大学院） **労働者の「品性」の争点化と「労働倫理」の誕生—19世紀アメリカにおける鉄道業の実践を手掛かりに—**

現代の企業は様々な規則を通じて労働倫理を明示するが、その原型は19世紀のアメリカ鉄道業がつくった。労働倫理の誕生の背景には、労働者の品性向上に奮闘する同時代の鉄道会社と労働者自身による奮闘の歴史があった。本発表では労働者の品性が争点となり労働倫理が誕生する過程を19世紀アメリカ鉄道業から紐解いていく。

古川 範和（研究助手、東京大学大学院） **徳を考察する方法論としての価値科学**

道徳には、人間が持つ様々な種類の価値が関係している。混乱を避けつつ、道徳の複雑な体系と向き合い理解していくには、相応の方法論が必要になる。米国の哲学者ロバート・S・ハートマンの著した『価値の構造』は、そのような方法論を模索する上で非常に参考になる。本発表では、その内容を紹介する。

横田 理宇（研究員、麗澤大学助教） **テキスト分析に基づく品性資本定量化の再検討**

本発表では、まず、道経一体経営を行う経営者へのインタビュー調査を通じて実践者が考える最高道徳的経営の実態を明らかにする。その上で、H18年～24年実施の道経一体講座参加企業のデータを用いて品性資本定量化の指標（モラロジー研究所、2006）を再検討し、金銭資本との関係性についても統計的分析を行う。

小山 高正（客員教授、日本女子大学名誉教授） **家系を継ぐ意義とその機能について**

インターネットのネットワークで水平につながる現代人にとって、家系という縦のつながりはどういう意味があるのか。モラロジーの伝統の原理は、それに対して何を提示できるのか。廣池千九郎の古代中国親族法研究、伊谷純一郎の進化人類学、エマニュエル・トッドの社会人類学などから家系を継ぐ意義と機能を徳の視点も含めて再考する。

◆ミニシンポジウム「徳をめぐる個人と社会」

大野 正英（室長・教授、麗澤大学教授） **共同体と徳**

アリストテレス以来、共同体が追求すべき共通善と個人が身に着けるべき徳との間には、密接な関係があるとされてきた。現代の共同体主義の議論をとりあげて、その中で徳がどのように取り扱われてきているか、特に共同体の中で必要とされる徳とは何か、その徳を涵養するには、などの点について論ずる。

竹内 啓二（教授、麗澤大学教授） **社会構成主義と道徳**

画一的理解や合理主義（効率主義）では捉えきれない複雑さが人間にはある。この点でナラティブ・アプローチ（物語りや関係性を重視する手法）が注目されている。ナラティブ・アプローチと社会構成主義は密接に関連する。社会構成主義と道徳に関する研究を紹介しながら、新たなモラロジーの理論的展開を模索する。

木下 城康（研究員）

"Meaning, Relationships, Engagement" 時代における「徳」の扱い方—対人援助コンピテンシーと「徳」—

現代を生きる個人は、意味（Meaning）のある仕事を信頼できる仲間との人間関係（Relationships）のなかで、集中して取り組む（Engagement）ときに幸せと成功を感じている（尾原、2017）。発表では、個人を援助する立場のコンピテンシー（実践的総合力）を取り上げる。援助者に求められている実践的総合力についてアイデンティティとアダプタビリティ（適応）に焦点を当てて報告する。

大阪会場 発表者と発表要旨（平成31年2月17日）

◆個人研究発表

久禮 亘雄（客員研究員、京都産業大学准教授） **柳田國男と平泉澄—「自分の言葉で語る」学問を目指して—**

廣池千九郎博士の道徳科学（モラロジー）は、日本が持つ皇室の存在を中心に、新たな学問を構築し、社会の改善を促そうという試みであった。大正時代には、博士と同様に日本的な新しい学問・社会運動を模索する研究者が現れている。本報告ではそのうち柳田国男と平泉澄を取り上げ、博士との共通点・相違点について論じる。

アブドゥラシイティ アブドゥラティフ（研究員）

イスラーム倫理の枠組みに関する考察—ムウタズィラ派を中心に—

時代背景と資料の関係で、廣池博士はイスラームの研究には踏込まなかった。今回の報告ではコーランにみられる倫理想、特にムウタズィラ派の思想的立場づけ、同派の倫理想の特色を解明することによって、イスラームにおける神観念、人間観、救済観といった一般に共通するものを理解するための土台を固めようと試みた。

宗 中正（副センター長・教授） **徳を徳たらしめるもの—3つの視点から最高道徳を考える**

最高道徳における徳について、学び実行する立場から検討する。今回は、「精神と形式との往還」「自己保存—適応—進化という基本軸」「徳の偏在」という3つの視点から、最高道徳の理解と実行における課題を取り上げ、実行上の手がかりを共有すると同時に、自発的に求め創造する道徳のあり方について考えたい。

◆ミニシンポジウム「モラルサイエンスの視点を踏まえた公益としてのモラロジー—教育活動の展開」

川久保 剛（室長・主任研究員、麗澤大学准教授）

「目的価値としての道徳」を基軸とする学習体系への転換—道義を追求する人生それ自体の幸せ—

モラロジーは「道徳」を「手段」と考える。つまり個人及び集団の「安心」「平和」「幸福」という「目的」を実現する「手段」が「道徳」であるというわけである。しかし、このように「道徳」を他の「目的」の「手段」と見なすことは妥当なのであろうか。むしろ「道徳」は他に奉仕することなき「目的」そのものではないだろうか。「目的」としての「道徳」という視点から人生における「道徳」の価値について論じたい。

尾高 秀之（研究員） **モラロジーの現代化と公益から公益への転換の試み—伝統と未来の融合—**

廣池千九郎博士の教えは数多くの人々を救った。その伝統を維持発展させながら同時に現代社会の要請に答えていく必要性が問われて久しい。それを実行して成功するには具体的なイメージを創造して共有することが不可欠。公益とはモラロジーを知らない人々にも資していくことを意味する。伝統との両立を具体化する方法について考察する。

◆講演 **所 功**（研究主幹・教授、京都産業大学名誉教授）



演題 「今上陛下ご修徳に学ぶ」

満85歳で近く譲位される今上陛下のご修学・ご事績については、拙著『皇室に学ぶ徳育』（平成24年、モラロジー研究所）第9章～第12章に詳述した。今回はその後新たに収集し確認できたご修徳に関する主要な資料を紹介しながら、スメラミコトの現代的な理想像を体現された今上陛下の御聖徳について解明を試みる。

柏会場

会場：廣池千九郎記念講堂

平成31年1月26日(土)

- 13:30 開会
13:50 宮下 和大
14:50 犬飼 孝夫
15:30 梅田 徹
16:25 《講演》 立木 教夫
演題 「道徳はいつ始まり、どのように進化したのか」
質疑
18:00 懇親会「まんりょう」

1月27日(日)

- 9:00 宗像 俊輔
9:40 古川 範和
10:40 横田 理宇
11:20 小山 高正
12:00 ~ 《昼食》
13:00
《ミニシンポジウム》
「徳をめぐる個人と社会」
大野 正英
竹内 啓二
木下 城康
コーディネータ 宮下 和大
15:00 全体討論
15:40 閉会

- ◇ 参加費 3,000円(食事・宿泊・懇親会代別)
・ 懇親会 5,000円
・ 宿泊：研修寮(朝食付) 4,500円
・ 27日昼食 1,000円
◇ 申込〆切 平成31年1月18日(金)

大阪会場

会場：シティプラザ大阪

平成31年2月17日(日)

- 9:30 開会
9:40 久禮 旦雄
10:40 アブドゥラシイティ アブドゥラティフ
11:20 宗 中正
12:00 ~ 《昼食》
12:50
《ミニシンポジウム》
「モラルサイエンスの視点を踏まえた
公益としてのモラロジー教育活動の展開」
川久保 剛
尾高 秀之
コーディネータ 川久保 剛
14:20 《講演》 所 功
演題 「今上陛下ご修徳に学ぶ」
15:30 全体討論
16:10 閉会

- ◇ 参加費 4,000円(昼食付)
◇ 申込〆切 平成31年2月8日(金)

【お問い合わせ・申込先】

公益財団法人モラロジー研究所
道徳科学研究センター事務室

TEL：04-7173-3252・FAX：04-7173-3263
E-mail：rc@moralogy.jp

下記の申込書にてFAX、郵送、メールにてお申込ください。
人数が多い場合は、申込書をコピーしてお使いください。

※都合により一部日程に変更がある場合がございます。

平成30年度モラロジー研究発表会参加申込書 (FAX:04-7173-3263)

会場名 (柏 ・ 大阪) ※参加される会場に○をつけてください。

フリガナ 氏名	性別	住所	モラロジー事務所名 ※会員の方	柏会場参加の方のみ		
				懇親会 26日	宿泊 26日	昼食 27日
	男・女	〒 TEL: メール:	事務所			
	男・女	〒 TEL: メール:	事務所			

お知らせいただいた個人情報は、本事業に関する利用目的の範囲内でのみ利用します。

※ 柏会場参加の方ご希望の方のみ太枠の該当欄に○をつけてください。

また、申込書をご提出いただいた方全員に要旨集を1月初旬から送付いたします。ただし、直前にお申し込みをされた方は会場でお渡しします。